

## ● 日本の主な火山活動

口永良部島の火山活動は活発な状態が継続している。新岳では、6月19日のごく小規模な噴火以降、噴火は観測されていないが、火山性地震が時々発生した。火山性微動は観測されていない。火山ガスはやや少ない状態で経過している。今後も、5月29日と同程度の噴火が発生する可能性がある。大きな噴石の飛散及び火砕流の流下が切迫している居住地域では、厳重な警戒（避難等の対応）が必要である。

桜島では、8月15日に南岳直下付近を震源とする火山性地震の多発や桜島島内に設置している傾斜計及び伸縮計で山体膨張を示す急激な地殻変動が観測されたため、噴火警戒レベルを3（入山規制）から、4（避難準備）に引き上げた。その後、南岳の地下に貫入したマグマの浅部への上昇は停止し、新たなマグマの貫入も生じていないと考えられることから、9月1日16時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）に引き下げた。これまで繰り返し噴火活動が続いており、今後も活発な噴火活動が継続すると考えられるため、火山活動の推移に注意が必要である。また、8月15日頃に貫入したマグマのさらなる上昇は今のところみられていないが、再びマグマ貫入がある場合などには、桜島の火山活動の活発化は避けられないものとみられ、引き続き火山活動の変化を注意深く監視していく必要がある。昭和火口及び南岳山頂火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。

阿蘇山の中岳第一火口では、14日09時43分に小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上2,000mまで上がった。この噴火に伴い小規模な火砕流が発生した。変色域の分布から、火砕流は中岳第一火口から南東方向に約1.3km、北東方向に約1.0kmまで流下したと推定される。また、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口周辺に飛散するのを確認した。今後も同程度の噴火が発生し、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口から1kmを超えて飛散する可能性があると判断し、同日10時10分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げた。中岳第一火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒が必要である。

西之島では、海上保安庁等の観測によると、噴火による噴石等の堆積や溶岩の流出が継続している。西之島では、今後も新たに形成された陸地にある火口で噴火活動が継続すると考えられる。また、西之島周辺の海底で噴火が発生する可能性も引き続き考えられ、噴火による影響が海上まで及んだ場合、弾道を描いて飛散する大きな噴石や、水面を高速で広がるベースサージ等の影響が概ね2kmの範囲に及ぶおそれがあるので、西之島の中心から概ね4km以内では噴火に警戒が必要である。

箱根山では、大涌谷で6月30日から7月1日の間に発生したと考えられるごく小規模な噴火の発生以降、噴火は観測されていない。火山性地震は少ない状態で経過している。地殻変動についてはGNSS観測等により、山体膨張は停止したものと考えられる。これらのことから、11日14時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げた。一方、地震活動は低下したものの、4月下旬の活動活発化以前の状態には戻っていないこと、大涌谷周辺では活発な噴気活動が継続していることから、大涌谷周辺の想定火口域では小規模な噴火が発生する可能性がある。大涌谷周辺の想定火口域では小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

雌阿寒岳では、全磁力連続観測によるとポンマチネシリ96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力の変化が継続している。ポンマチネシリ火口付近の浅いところを震源とする、微小な火山性地震は、8月以降徐々に減少しているが、2015年4月中旬より前の活動と比べて依然としてやや多い状態である。ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、ごく小さな噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

吾妻山では、大穴火口からの噴気活動はやや活発な状態が続いている。大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可能性があるため、大穴火口周辺（火口から概ね500mの範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

草津白根山では、湯釜火口内北東部や北壁及び水釜火口の北から北東側に当たる斜面で熱活動の活発

な状態が継続している。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス成分及び湯釜湖水の化学成分にも活動活発化を示す変化がみられている。湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

浅間山では、6 月 19 日の噴火以降、噴火は観測されていない。山頂直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震は多い状態が続いている。また、二酸化硫黄の放出量も多い状態で経過しており、引き続き火山活動はやや高まった状態で経過している。今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

御嶽山では、火山活動は低下した状態が続き、昨年（2014 年）10 月以降噴火が発生していないことから、昨年 9 月 27 日と同程度の噴火の可能性は低下していると考えられる。一方、弱いながらも噴煙活動や地震活動が続いていることから、昨年 9 月 27 日より規模の小さな噴火が今後も突発的に発生する可能性は否定できない。火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

霧島山（新燃岳）では、火口直下を震源とする火山性地震が時々発生した。GNSS 連続観測によると、新燃岳周辺の一部の基線で、わずかに伸びの傾向が認められる。また、北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2013 年 12 月頃から伸びの傾向がみられていたが、2015 年 1 月頃から停滞している。火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

諏訪之瀬島の御岳火口では、爆発的噴火が 89 回発生するなど、活発な状態で経過した。今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるため、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要である。

白山では、9 月 2 日に噴火警戒レベルの運用を開始し、同日 13 時 00 分に噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）を発表した。火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

**表 1 9 月 30 日現在の火山現象に関する特別警報・警報・予報等の発表状況  
（※印のついた火山は火山現象に関する海上警報も発表中）**

特別警報・警報・予報	噴火警戒レベル及びキーワード	該当火山
噴火警報	レベル 5（避難）	口永良部島※
火口周辺警報	レベル 3（入山規制）	阿蘇山、桜島
	入山危険	西之島※
	レベル 2（火口周辺規制）	雌阿寒岳、吾妻山、草津白根山、浅間山、御嶽山、箱根山、霧島山（新燃岳）、諏訪之瀬島
	火口周辺危険	硫黄島※
噴火警報（周辺海域）	周辺海域警戒	福徳岡ノ場※
噴火予報	レベル 1（活火山であることに留意）	十勝岳、樽前山、有珠山、北海道駒ヶ岳、秋田焼山、岩手山、秋田駒ヶ岳、安達太良山、磐梯山、那須岳、新潟焼山、焼岳、白山、富士山、伊豆東部火山群、伊豆大島、三宅島、九重山、雲仙岳、霧島山（御鉢）、薩摩硫黄島
	活火山であることに留意	上記以外の活火山

\*噴火警戒レベルは、その活用が地域防災計画等で予め定められており、レベル毎の防災対応がキーワードで示されている。



図1 9月30日現在、火山現象に関する特別警報、警報及び火山現象に関する海上警報発表中の火山

各火山の9月の活動解説

【北海道地方】

**雌阿寒岳** [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

ポンマチネシリ火口付近の浅いところを震源とする、微小な火山性地震は、8月以降徐々に減少しているが、2015年4月中旬より前の活動と比べて依然としてやや多い状態である。

全磁力連続観測<sup>1)</sup>によると、全磁力は2014年3月以降概ね横ばいで推移していたが、2015年3月中旬以降は減少傾向を示している。このことから、ポンマチネシリ96-1火口近傍の地下では、2015年3月中旬以降熱活動が活発化している可能性がある。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、ごく小さな噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>2)</sup>に警戒が必要である。風下側では火山灰や小さな噴石<sup>2)</sup>が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

**十勝岳** [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

6日から7日及び16日から17日に実施した現地調査では、6月から8月の現地調査で確認した振子沢噴気孔群の地熱域の広がりを引き続き確認した。この地熱域の広がりには17日に行った上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協

力による）においても確認し、また、振子沢噴気孔群の刺激臭を伴った噴気や62-2火口南縁と振子沢噴気孔群の間の地熱を伴ったわずかな亀裂、前十勝頂上付近の複数の列状の噴気も引き続き確認した。62-2火口底の湯だまりの湧出は停止していた。

62-2火口とその周辺では、引き続き熱活動が活発な状態が継続している。

GNSS<sup>3)</sup>連続観測及び繰り返し観測では、2006年以降、62-2火口直下浅部の膨張を示すと考えられる変動が引き続き認められている。火口に近い前十勝観測点では観測点周辺の局所的な変動と見られる変化が5月頃からみられていたが、7月以降鈍化している。望岳台－翁温泉－湯の滝を結ぶ基線では5月頃からわずかに伸張しており、2006年以降みられている62-2火口直下浅部よりも深い山体内でごくわずかに膨張している可能性が考えられる。この伸張は、8月以降鈍化している。

十勝岳では、直ちに噴火に至る兆候は認められないが、ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。